

俳諧一葉集

二



俳諧一葉集附合之部

古学庵佛号  
幻窓湖中 編  
坎窩久藏 校

延寶五丁巳春

桃青

此梅千牛も初春と噂つ下  
まーとや怪人下への作 信章  
まの粉と志やまゝる春の中に  
破味噴まーつもの神象の下菊 青  
摺跡を差込おすくころも  
むろくくく紀の男ゆりく  
章

眺めひくけそ笑へる世の月  
爪はくくゆくや一曳の山  
とす原のまのまのさる果のそ  
ひくくひくやうの住より一の松  
淡路一は仕形を新一のまをて  
友よふとりののこひありある  
青染よまの白染の橙を毛  
葉のひ風の本葉六そ  
古葛原ふかれく這て遊ばう  
出づりさうにむごうあひのめ  
急の秋にたはくめまをよ  
吉祥天女やうれむとの月

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

あつ〜は強路うる山から  
松のゆ〜はひくく再たふ  
大星は代を花やかくらひく  
かすみ〜もらんき天竺のまぬ  
とりの重女一文の粉をとく  
風進退を割る井庵  
瞞の路をより京通ひまは果て  
うみあ〜のる勢う〜の中  
地〜の石向な〜ちひて  
葉の松山葉は好  
子架の浦は〜は〜橋の隅  
雪はさ〜て〜

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

三  
 山椒つしやわぬ椒ふしむ  
 梅塙下ま角の残のま中ふ  
 人尻ふしむとや梅の産  
 不二の嶽つしむを刺し  
 け山ふしむの料平也  
 土も木も三百ふしむに  
 大守中畫巻を親子取と  
 乙儀の掟ハのれ終ハ  
 子何ハハわすれハ何おさ  
 禮を毛き法をさるを  
 障目費新好霞千朽果  
 上野下屋の牛けまを

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

三  
 山椒つしやわぬ椒ふしむ  
 梅塙下ま角の残のま中ふ  
 人尻ふしむとや梅の産  
 不二の嶽つしむを刺し  
 け山ふしむの料平也  
 土も木も三百ふしむに  
 大守中畫巻を親子取と  
 乙儀の掟ハのれ終ハ  
 子何ハハわすれハ何おさ  
 禮を毛き法をさるを  
 障目費新好霞千朽果  
 上野下屋の牛けまを

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

小松やうらうらぎの引さし  
其石よりい女のよの夜  
うらひの影の二階ハ切きりれと  
か—こを揚屋き砂の松  
とうふりて長柄の橋つくり  
能因法師若ふのしと  
照つけく色は玉やや焼つて  
つとらちのこけの眼あけの月  
飢餓と—弱くくつめり秋の  
多くハ保るる葉の上  
一葉つ柳の葉やさけぬ  
うけくもたれあすのけし  
青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

お友の身ハうらやまのこめ  
対面陣—至むの—淨瑠璃  
ねらねらうらやまの山端  
ねらねらうらやまの山端  
君うらやまの二布の下紅葉  
うらやまの秋をききあけ  
月すくも影のこめ  
阿内のあけうらやま  
四葉まの川屋の里も海をく  
浪や—芦垣伝の  
叶を花入江の影の中  
や—一編 杉や—葉の記  
青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

名  
 いしきくハ魔はしきまをこと久八尺よ  
 セリシのく入おめり  
 葉湯三升の古寺汲りけり  
 露さきし結しきのこち枝  
 階はぬら目く八目より  
 涌之れ巻き玉合のそ  
 既子神みりてけりさゆひ  
 白蟻殿ハ沙季より結り  
 つくしと向きたりし隣山  
 入り入敷屋ハ小蛇の跡を  
 思ふ夜ハ狐のあまをまらさむ  
 ぬきく子楊りし神のあまのあま

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

唐人も夕の月よりくれあき  
 古文書 冥寺のつきり 秋  
 酒の香たきけ起り白雲飛  
 了物たふしや人のくさきや  
 新のよまに杖の大木大間屋  
 泣きとけりえき多のあまのま  
 秤より日本のおもやうけぬん  
 所へ結のまをこつめぬら  
 花子よりと禁の里ハ十園子  
 夕坂のゆきハ峰のまらり

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

同年春

信章

梅の風 ぬれぬき さらん あり  
 くらと くらと けり けり 春  
 春 和 入 ず 雲 の きぬ の 袖 へ 入 了  
 けん や けり ぬ 心 の けり けり  
 春 けり けり 中 けり 方 けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり  
 海 けり けり けり けり けり けり  
 趣 向 けり けり けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり  
 音 けり けり けり けり けり けり

松 枝 の 木 下 の 花 春 けり あり  
 春 枝 擔 桶 きり けり 村 雨 の けり  
 夕 陽 けり 生 けり けり 春 けり けり  
 春 子 の す けり けり 山 の 端 けり けり  
 寓 意 の けり けり けり けり けり けり  
 桐 壺 けり けり 木 けり けり けり けり  
 瑞 の 春 けり けり けり けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり  
 古 里 の けり けり けり けり けり けり  
 春 加 山 の 春 けり けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり  
 けり けり けり けり けり けり けり

河を渡り池のほとり石は  
玉子のあやうらうら  
傳ゆの風のよきあんな  
上 碧の葉よきふた  
付とくけのよきふた  
親類ふたのよきふた  
寺井よ大なるゆれ  
柳のよきふた  
古帳のよきふた  
火鉢のよきふた  
よのよきふた  
河を渡り池のほとり

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

くそ 野きけハそ  
地獄のゆめ  
飛舞のよきふた  
庭子のよきふた  
釣瓶のよきふた  
庭ハにら  
志のよきふた  
白むくのよきふた  
ゆめ  
床のよきふた  
虎の毛

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

くろくしみの藤地の崩ちをよんて  
 字もえあつる秦の法こそ  
 三 物もよみ徐福の似をよるま  
 まの意しるる乾神の外  
 瀬戸の去ま輪流をちるぬま  
 弁才天より 鮫さくくお  
 可成ほろの法よぬ海このこ  
 その夜の不二より足おの山  
 かんふ肩はいついさうとて  
 見よしく成佛とよぶかゝの法  
 龍井法府をすくおの肉  
 龍田のよみ果巨腐田玉丁

字 字 字 字 字 字 字 字 字 字 字 字 字

おつめもたをくく心の二を  
 人死の志れさくくあ  
 大火事をも袖りぬるあま魚  
 やくしゆのよまの松山  
 三 旧を橋らんよまを端よし  
 方く尺をくくそ作世の源今  
 かつらよみさくくから拂ふまの言  
 詠のハくくさくくさくく  
 伝くあき芦のよのいふよの中  
 何とし松をすくくく尺ゆん  
 くち柿とも常よまぬぬ鳴の  
 保町の去を焚くくく

字 字 字 字 字 字 字 字 字 字 字 字 字

物語伝承の白紙にうまれし  
よかしの秋に瘰癧<sup>シキヒ</sup>阿蘇地へ  
かみそりも内付ふもよめ月  
のしきんけりしとてゆふの  
衣履も既し孫勒の花待  
かしの海嶽もあぢのま  
名  
岩鴉やまんとうけしる一  
天のつらぬく虹のつらぬ  
その四隅多門の糸本を  
日傭の乳子と免魔おと  
習はるる野安金すふと  
意也ハミタムシウツル糸の

人とも思ひしんや親の玉  
糸のつらぬく糸の竹 笑  
いまのねひしり艾葉の百  
寺根のまをと少健り尺  
外しり海洲今川寺子や  
さしこめこみとエ糸糸  
木の月城を弓まよひら  
保原ハいさこ横河の  
よき新葛葉面しりし切  
大根の情しりしりし  
路板式本草を漢誦する  
もむせいの本草糸糸の



晴つきの坊主も秋や少やらん  
 手一休り尺をさる物の月  
 花のよる朱鞘をこぬき夕言  
 川やきつたけ岸の山も  
 二  
 下川もさあつてさあつて  
 残竹より新雪の海ゆく  
 風多く物枝百本割るらん  
 夢中一握の紋のうらま  
 双六の書置もさあつて  
 宿舎の跡をさす山も  
 月のあつた島田を公家の之瀬川  
 かゝ尻流も瀬川も

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

小童園の大地のうらみ 鎌 取  
 弦の飯椀湯とさるらん 中  
 一三 秋法をさるらん 考こさ  
 月ハおしりの親仁友らん  
 養  
 胸 兼 用 の す き みるらん  
 練 履 も 半 の 秋 法 演 風 子  
 手 子  
 河 々 々 々 石 魂 忽 然 子 子  
 古 明 地 蔵 の 草 芥 子 子 子  
 燈 籠 子 子 人 子 子 子 子 子 子  
 文 正 子

青 青

今りく新ねきくまぐくふ  
 物くくくくくくくくくく  
 何くくくくくくくくくく  
 月影や星の琥珀の曇りか  
 霞えくくくくくくくく  
 法の名くくくくくくくく  
 名跡の原くくくくくく  
 上いひ越のくくくくく  
 百景石の梅の影ふく  
 雪くくくくくくくく  
 守随極の雲の楳 集

青 法 青 法 青 法 青 法 青 法 青 法 青 法

掛乞も小何くくくくく  
 くくくくくくくくくく  
 小物くくくくくくくく  
 入るはくくくくくく  
 海号やまのけくくく山  
 さる紫人のくくくく色  
 蹴希くくくくくくく  
 くられた雨木のうら  
 飛のくくくくくくく  
 森の影風くくくく  
 二粒深くくくくく  
 三 望の山を引くくく

青 法 青 法 青 法 青 法 青 法 青 法 青 法 青 法

茶代の古名... 呼ぶ...  
 雙女... 羽衣...  
 田子の浦... 履持...  
 不... 舟...  
 赤... 舟...  
 松... 舟...  
 清... 舟...  
 尾... 舟...  
 糸... 舟...  
 涙... 舟...  
 衣... 舟...  
 白... 舟...

路の... 一... 二...  
 片... 山...  
 幽... 舟...  
 舟... 舟...



種田殿進退ちあまたのちかて  
 二人の若女浪人小姓  
 牛三平ちきれうもひを定  
 法しけわつけ残さうの母衣  
 心をあめさのほくまをハ  
 浪せき入る大巻の洞  
 首徳津地獄の底くさうはら  
 珠扶解のちをを碑くる  
 酒の月はあおのし振る  
 隙の内段おまの  
 肩をぬ袖ささうする花  
 二  
 中夜もくハ世帯一おま

寺 法 寺

十  
 四

瑞の尻入りのひききき  
 のり庵のくくと鴨のつら  
 山うけの精進さる松の  
 三十三寺松取てし尻  
 子帳や俊威仇のちうけ  
 宇草法海小僧新者志  
 いろは顔枯之山さあう  
 ちを増福うけ白梅秋  
 新しうく長月法の本根  
 時の中はねうの給一  
 寺  
 まういふは母橋のぬけ

寺 法 寺

十  
 五



若くはうのたの流空のハ音を即  
 かつすすのわ右近あらん  
 雲の月橋の精めくを舞う  
 すも山も志は成佛  
 又性の眼の光く陽の輝  
 舞穂の光く因果すふくら  
 志のやまをなすいづらの雲の  
 志きうのく十幾目とこ  
 大八やまのい車の思ゆらん  
 日産をめぐりく夕の影の松  
 山花の柿 輝の鹿のけ  
 青の雲の目白羽のさく地く

寺 法 寺 寺 法 寺 寺 法 寺 寺 法 寺 寺 法 寺

十  
 三

言月等々 本家のみかやまをらん  
 よくのあらん 谷の海や 月  
 山をく流舟のうきをきし  
 海軍のくさく 標のり 飛  
 白あつ 花のまをの修徳ある  
 兜 政中の物いふよ 志  
 延坂も中台のうみ引巻く  
 山まく山や三玉の九郎今  
 舞子飛 笛安くやくまをく  
 松風 花の思成をそとく  
 春物の二巻の巻の葉 三六反  
 楚玉のかけく 桜河の秋

寺 法 寺 寺 法 寺 寺 法 寺 寺 法 寺 寺 法 寺

邯鄲の里の新花月吟  
 よくくしやうの舎ふをぬる  
 子白より十萬倍も鼻の先  
 糸おろしつたのさ武昔 落  
 音楽のふる三味線あいの心  
 四折さハく牛の初 法  
 姉妹の佛伽は丘尼のりても  
 ほかのさうしとの佛もくすま  
 ゆつぎ—黄金の膚こるやうな  
 小娘みしよの草 袋あ  
 松林油くまきやき—姉らん  
 鯛く飯ゆらき—焼く  
 香 法 香 法 香 法 香 法 香 法 香

ちのきりしんくし汁のうき情  
 連理の葉はれり—をたろ  
 空や花白ふて—焼第のう  
 店ちく帰—の羽第のう  
 香 法 香 法 香

同年春

知のよと増や古郷のいのほろ  
 作くさるる百野里の喜  
 峰のまをうのひの学難る神く  
 ふ人力のあ風く—  
 態つ—のちく—のう  
 有右を—の神く—のう  
 香 法 香 法 香

竹徳

桃青

竹章

法

香

香

雲の影葉のら葉のらつらひと  
 尾花の柳の鏡かきく可  
 吹とんいさる風の末すい吹  
 丈ハ山依海士れよひを  
 一念の解と毒く七まとい  
 かしらハ鬼の穴神いしくく  
 残ふりつ修なるふより上りく  
 神のいのきをくくく 聖めく  
 魂をくこの木の葉くや切つらん  
 伝ふくくこれのちんを引く西  
 骨くつき忍びのまきくくくく  
 之切くくくくくくくくくく

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

夕多言少風をくく水の内  
 本際さくさの紅葉くくくく  
 花子嵐河きらんくくくく  
 柳子つこのくくくくくく  
 二 了侍有信令子くくくく  
 勤少由ゆくくく二月月中旬  
 釋迦殿子法式儀くくくく  
 八万能解汗古多解くく  
 張張や十方世界のくくく  
 九いのらハ森去のくく  
 山やくの地環をくくく秋  
 く海くくくくくくくくく

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

約とあつらひ給ふとくもむのき  
東坡の小山の竹の一枝  
共思ふ石の文のよき  
瓶子の海木残魚のさうさ  
去用志れ山を紺紙の青紙にし  
谷の多にえき美砂のこ  
吹矢を打ち思ふ海舟  
秋の志海の家をさやねえ  
まの中を給ふ曹のさ  
志の多をさきしすのれ  
そ業平の情人やあふ

海 亭 海 亭 海 亭 海 亭 海 亭 海 亭 海 亭

本城色は秋の竹のさ  
ひんちの秋の竹のさ  
物やうし世の秋のさ  
松江の海舟の店  
ぬく桶の鮫のさ  
平月白うらむくの志  
花のさしん秋のさ  
父大郎のさ  
子花のさ  
及の中  
お男の席のさ  
と儀のね給ふ

海 亭 海 亭 海 亭 海 亭 海 亭 海 亭 海 亭 海 亭

園石の拂子家より子持家  
 火付の巻くはれぬらん  
 本三條縁を張るるらん  
 真の巻や飯おこしあつ  
 かこく可き難波の梅は兄弟  
 愛さくは巻 飯おこし 巻  
 巻のくは陶の水をぬめす  
 温能きくは巻は梅のくは  
 瑞鳥のくは中の宮は縁を引く  
 急のやくらくは種くは巻く  
 買うは巻は如浮巻を付く  
 川の大き巻くは佛一堂

巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻

巻は巻の三巻は甲申五月五日巻の  
 巻獄やふくは巻は破くは  
 小柄ぬは巻の枝はた巻く  
 減金ゆは巻は巻くは巻く  
 子巻は木くは巻くは巻く  
 巻戸のくは巻くは巻くは巻く  
 巻の文字一ふは巻くは巻く  
 巻のくは巻くは巻くは巻く  
 秋や巻くは二代目の巻くは巻く  
 巻のくは巻くは巻くは巻く  
 巻の枝は巻くは巻くは巻く  
 巻のくは巻くは巻くは巻く

巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻 巻

名  
 春の夜を尋ねてはあまのついでに  
 抄るハコつけ、足ぬひうらつとく  
 良志付し下女としの我ひに  
 春のふれに旗もあひうす  
 酒梅子引草の一向志矢され  
 情以ハ人をもはく くら  
 春のふれに破れく言ひたりし  
 春のふれに終る未ぬ衣敷に  
 春のふれに瓜の先をとりぬ  
 春のふれに北のふれに  
 春のふれに内親王は山と紫  
 乳母さく物ハあまのついでに  
 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

春の夜を尋ねてはあまのついでに  
 抄るハコつけ、足ぬひうらつとく  
 良志付し下女としの我ひに  
 春のふれに旗もあひうす  
 酒梅子引草の一向志矢され  
 情以ハ人をもはく くら  
 春のふれに破れく言ひたりし  
 春のふれに終る未ぬ衣敷に  
 春のふれに瓜の先をとりぬ  
 春のふれに北のふれに  
 春のふれに内親王は山と紫  
 乳母さく物ハあまのついでに  
 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

同年秋

於四友亭無行

似春

次廣そ秋志やるを良儀見ども是ハ  
 初の ( ) の浦さしそく月  
 沖の石玉を神の香をたれて  
 足きしつれてや原の雪しむ  
 山おろりし小峰のうけさらると  
 去しつるころあふふあふあめく  
 甜海食ふまじりて様さく  
 禁をいふれつらぬゆく  
 ぬきし人三笠のまきやあかん  
 火付けの煙をくくくくくくく  
 雪霜の風公儀くくくくくくく

陽高きうを白髪の日  
 多夜中歌うたむきふま  
 洲崎の松たけくくくく  
 てくちくくくくくくくく  
 煙の多あり 撒くくくくく  
 又やまの海原門あけ物も  
 南朝四百八十日 米  
 芽也山くくくく武吉のせきく  
 浪とすり岩をきくくくく  
 花の趣月の夜風あめ付く  
 春柳よくくくく女房あつ  
 血のそきくくくくくくくく

胸のこころをさうさうとさうさうと  
 おのゝをすけりてはるる香花ハ  
 時雨の如き計をよとよふ  
 お花はさうさうとさうさうと  
 富貴の由はいよとよとよと  
 花のやうさうとさうさうと  
 舟の丸をさうとさうとさうと  
 さうかの候に候はるるのどや  
 甲斐の根や次郎の幕をさ入ハ  
 日上人は氣さうとさうとさうと  
 尾花の火もさうとさうとさうと

神代の氣まらさうとさうと  
 鳴ぬれハ美系とりの新候  
 風さうとさうとさうとさうと  
 お使さうとさうとさうとさうと  
 ニ言候とさうとさうとさうと  
 花の由やさうとさうとさうと  
 既さうとさうとさうとさうと  
 さうとさうとさうとさうと  
 さうとさうとさうとさうと  
 冷食を思ひさうとさうとさうと  
 是生滅法さうとさうとさうと  
 杉樫の言をさうとさうとさうと

冥ふ子やうふそハ紙燭て  
 口情の花は夢うやめくた印  
 ふくまてと都をゆくと山吹  
 ひとん多志不吐ううとや啼煙  
 あくふくくくくくくくくくく  
 お情子ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 根子ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 長敷の葉もゆゆゆゆゆゆゆ  
 葉らゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 歲月の少ねゆゆゆゆゆゆゆ  
 とくくくくくくくくくくく  
 破情の海もゆゆゆゆゆゆゆ

以ら子情を扱てくみゆら  
 悉名甜の族子くくくくく  
 ち引うゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 ちとくくくくくくくくくくく  
 三市をよく扱てゆゆゆゆゆ  
 珠のと回糸ゆゆゆゆゆゆゆ  
 山を時あきすく杉木の音  
 浮もゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 多氣をもゆゆゆゆゆゆゆ  
 幻をも柳打拵や君ぬゆゆん  
 官もゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 志もゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

三十一  
五

衣をも肩すうの衣は仕合  
酒子乞白雪帯をさあをこり  
秋風起ておのよきて 棒  
春遠も月のさきくハ忽ち  
尾を引すうて森のふ子  
御神頼別花ハあまの  
つ〜〜と〜の〜を〜飛り  
持け〜〜ニツの玉子かひ〜  
うらわさ〜度〜玉のか〜と  
空際子伊との帰樹とあはれ  
ふみ石あら 中ハ 十 六  
山行り 破り ち〜の〜

言わさしあゆといてやはあす  
物おを 都の西子あ〜つ  
あすの帰れ古を法り〜  
友園の二話一足やあ〜ん  
さ〜鼻 ち〜と 疎め〜き〜  
秋の二相覺火入とさけ〜  
格条の袖〜 月をさ〜  
思ひぬれあ方の妻あ〜つおゆし  
空峰 眼手〜く〜く〜  
情〜う〜う〜き〜  
思ひ〜〜  
逐利の法を裳めけ〜

換嘆 珠栲 叶吐息 つくくむ  
手事の膏糸 改千 新くきく  
おふし 松子 友の丸 出く  
より金の花 郭 云喜のら 花  
山く 云喜の 花 云喜を 花

同季秋

尺波をハ 流れハ 花ハ 花の秋  
桂の帆く 十か月の  
さうら 云喜を 云喜の  
山ハ 珠子 云喜の 花  
云喜 云喜の 花 云喜の 花

桃青

似春 四友

うけく 云喜の 花 大 将  
何くも 潮 湫 魚 鱒 郭のく  
おハ 云喜の 花 云喜の 花  
花 花 花 花 花 花 花  
花 花 花 花 花 花 花  
花 花 花 花 花 花 花  
花 花 花 花 花 花 花  
花 花 花 花 花 花 花  
花 花 花 花 花 花 花

長老のしんぶ君をそめしりしは  
修善寺のふれの降やいしくお  
宿ものありしを尋ねまうす  
花のまを磯山おまうみ侍  
宗生ものころよふもふのま  
白砂の旗をまのくつを  
ふどを軒端をりやめふくは  
寺のゆり定家あけ侍ま  
骨のくひ存ゆまゆめ 月  
八百手侍侍の光お文く  
狸のく川ちやいぬ寺の秋  
狼や香お衣千一衣お紫

後 等く 信正、 谷  
一宮峰岩千跡く 左刃の伝  
骨をまぬく彼の嶽を懐  
とをわすく切まく花おら  
笑の似をそま山竹の一村  
跡を扱く胸く 經年よの  
おの経の胸の火を侍おく  
まさらくな長持おしやれ  
いさまこ人をく可物おし  
跡の敷を素盞殿くも後初て  
研哉 勝く 双ちり 河川  
おましくかしく 静ぬのそま

三十一

三十一



石之川ぬあゝ山本の雪  
大地を凍つてゆく龍やの海もむ  
長十丈は鮫ふりゆく  
かたはりの橋板をくぐりて  
魚舟漁るゆく糸包丁  
ぬれ梅や少くもれは鹽水  
新緑にほれゆくおのれきん  
古糸の伊勢の山は雪も足  
河内ハ車糸も北風  
すくれては故郷の海  
魚を溜るゆく胸のすけ  
行舟のさす海をたもとす

名 幸 半 一 瓜 瓜 瓜  
新 是 其 怪 象 多 子 子 子 子 子  
代 八 車 伊 勢 糸 ぬ 一 一  
何 二 子 子 係 の 与 之 印 大 砲 子  
た 一 け 狂 心 糸 一 中 軍 一 子  
口 舌 一 子 糸 後 折 一 係 一 子  
ろ 一 子 の 一 子 糸 一 糸 心 糸 一 子  
是 一 子 糸 一 子 一 子 糸 一 子 心  
糸 一 子 別 一 子 糸 一 子 の 糸  
糸 一 子 智 一 子 糸 糸 糸 一 子 子  
蹴 一 子 糸 一 子 糸 糸 糸 一 子 子  
蹴 一 子 糸 一 子 糸 一 子 糸 一 子

けんどうの草まわしの湯は  
 小舟の常子溜の月と月  
 展平池の秋草の  
 露風も山を渡るかられ  
 かろくは下におく  
 片のあやうふ人形は風も  
 海士のまじりハ新の  
 阿の野火のうてね  
 八尋豆腐のこも  
 面影はねろー大根  
 あうく陰子うすむねの月

春  
 春  
 春  
 春  
 春  
 春  
 春  
 春  
 春  
 春

同季秋

のまれく初の大春江戸の秋  
 洞のかくもよ今水月  
 蜀山とのまじりき  
 酒舟の煙ハ汀浪  
 碓のねいさうハ松の  
 与飯のやまのさ  
 くのやのまじりの上  
 いつとも神  
 伊阿のまじりお  
 阿のまじり  
 初のまじり

似春  
 柳青  
 春  
 春  
 春  
 春  
 春  
 春  
 春  
 春

春燈

解かすもいひはるのうら歌  
お作ししは能くせむの降のあ  
被ゆにまゝそきき 植は  
小きもよきもたのしと思ふ  
鬼こゝろくさとし生捕りて  
天も花もまよふ縁程力も  
飯のこころはまよふも  
あゝあゝ猫ハ印く神くきし  
廻つひのいりまよふも  
歌の舟もまよふも耳はまよふも  
今捨置けりまよふ山ゆき  
畏れ門は降のまよふも  
ま 汐 ま 汐 ま 汐 ま 汐 ま 汐 ま 汐 ま 汐

おそは首の首うら月  
蒼 舌をハツてやけぬん  
古物 右近の歌を恋へて  
古川のうらまゝを尺さしや  
先まよふまよふは二けんの歌  
日待りまよふも  
やまも歌もおほめ目見すまよふも  
あゝのいりまよふも  
肉越すまよふも  
松ハすまよふも  
花ハまよふも  
ま 汐 ま 汐 ま 汐 ま 汐 ま 汐 ま 汐 ま 汐 ま 汐 ま 汐

肌子「まきむくくくひのち」

春

同

似春

春のやうに水菜あつちききつ  
山を越してはゆるき山  
柳枝うかすく月の影消え  
月影の肩を名づつあつち  
糸をきくまぬ木のぬる秋の風  
天下一歩目録きくくく  
浣色袖を洗のけりくくく  
やよ都ら天幕のさき  
貴くは不受不焼くくく

春院 柳青 春 春 春 春 春 春

秋のよのよのくくくく  
おのねりもよの裸くくく  
お風その夜に就きぬき  
出女お玉依姫はられとく  
柳代もきくす百文の志  
雲空の枕字子をくくおみ  
春かの帳仕首古まきく  
さよ中代儒者一人の月影で  
成ハ度ほ無ほの秋  
秋の葉のそをくくくく  
とくくくくくくくく  
きく納のそをくくく

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春



納ふよ（）を了るるこゝろ  
 浦もや根もあけさ悔むらん  
 嵐 阿比由くさ謝の又浪  
 於小舟宋世の泣きひき  
 花も心離もあふ生 けり  
 とおしんはあしこ女は負振神  
 大海とくひいひきく ちか  
 一頁の月合の切らさうまて  
 ばらちりありー小男棄の角  
 数芝居ぬれしや袖の雨のや  
 左のちきと右とー ちか  
 麦飯の井や麦子雲あふらん

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

妙ふくのくもさうくもつうい  
 幽冥ハ残濤舟くくくひか  
 さの坊ルくくひきさ海子の浪  
 殺くくく金就ふやんくつちか  
 智天寺くけくくくくくさん  
 帳向の志火を油あけくきて  
 ちかくくく ちかハ石川もくく  
 まのあひきすくくくくくく  
 既く不帯も軍やちかてく  
 料の力様所さくくくく  
 浮かをおる子忘衣くつ  
 吉男くくくあれら秋文く

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

朝の床子志免ころり  
唐のすげみくらり  
ききしものきお天のうし  
休ほ暇のよめうけふも  
古葉子えり仲人のち

同

桃青

宮や内下の子金の通り  
まふ敷きぬ看板のち  
新葉も七三馬かられ  
芦の葉らゆりし味るる浪  
甚や棚のし小舟よぶ

この男ととる布その  
糸ものも光悦流るる  
葉草喻不とすり  
玄論の強地の奴も  
あそととる子緑青の山  
隈との峰より自の  
秋を中布此布り山  
枝の勢ゆるり  
精を所け此三位入  
かとおもひはるる  
又厚ととる陸子  
ききしものきお天のうし

三十一  
五

詠田のれくら博楽くらりー  
毛體も佛門の目くら綿あり  
そらや愛裳の深草す  
破れ祭の衣のけりは波吹とちよ  
岸にす 羽の郭云 とらふ  
押入や波のこころ北窓階子  
織子の衣し物衣冠の森  
能く支えし物衣冠の松たて  
庭様うくゆくゆりー  
月朝とす根のちのちやうい  
姐板の 月朝孫の不二  
若の秋三子 節人の拂物

二葉子

紀子

ト尺

二葉子

桃青

ト尺

紀子

桃青

二葉子

紀子

ト尺

二葉子

釋かともこのうを欠落の時  
叔母の精舎のうをてつらひに  
大坂之川と瓦のこはら  
津守の火入とやい是とや  
鬼一口子 物衣冠を喰 割  
若の肘子方と川一若衣冠  
若れとをこの五代の生

桃青

ト尺

紀子

桃青

二葉子

紀子

ト尺

同七毛未冬

つらふ子 燕菜子 つらふ子の言  
荒蕨味喰こー 岸修子 望  
浪風の基衣子 節の芳河子

桃青

千春

信徳

瑞手は籠衣おもしろくつけつ  
 籠衣は籠衣も力の入るや  
 紙糊けしきハ勢は平し  
 何し強しやい女、枕の初尾を  
 百もねらうさうたさ少れの秋  
 仇し吾をかうこの程分の説きハ  
 又男の思かうらハかうくわ  
 古の相好す志そし  
 つくくは泥論のやを福を  
 強ひくとあぬさへきうの  
 強かきもれくやうの音の月

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

雪舟子さう原の 細き  
 料理人少きをまき霧の浪  
 本を厚の扇けのまき風  
 佐吉のゆき子尺のぬ小刀紙  
 海のはね松 強ものをもとく  
 志ぐくに襦袢と袖も狭うつ  
 枕あきくし 橋めけの果  
 端とつす天の厚さし中強て  
 経の白あす 強きうし  
 滑川のゆき 艾子火きし  
 朝の空し 雨の帯の風  
 雪のきさし 利久と川一は

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

おはるの三節一々の月  
虫のあつてくまのまき  
いさこ長一々石摺の  
とんぶれのとけしをいさ  
園生のまきまき十四竹  
引くやうに食の味背まき  
うまのまきまきまき  
思ひ川堀敷く七りのまき  
七月まきや編居のまき

春 春 春 春 春 春 春

同季春  
着想

さけけく二内中旬初  
天下の想のけあまき  
あまきあまきあまき  
まらふ嵐子まきあまき  
中下くまきあまき  
谷の戸はくまきあまき  
上くまきあまきあまき  
千里の想もまきあまき

秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋

同  
いさつてやまきあまき  
山をまきあまき  
樞のまきあまき

秋風  
秋風

子よ桐葉の度袖有るまで  
 とぬのこころし風のみく  
 阿の時は餅のあつる空の  
 猪まをたふし時のぬく  
 知るけ岩根の床たふれ風  
 あつたゆもさす葉のし  
 葉ゆきふ袖も侍ふ風こ  
 何と軒子とまのしけり  
 五十点あつちもはるま  
 じつと心も残りも  
 随分とあつちもはるま  
 青羽あつちもはるま

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

小柳のゆきもさす葉のし  
 とぬのこころし風のみく  
 風自ふ小使童く後く  
 原吹たつたは夕つゆ  
 衣もたつたは夕つゆ  
 ちくちくし葉もさす葉のし  
 ちの葉色の影もさす葉のし  
 雲もさす葉のし  
 とき板たつたは夕つゆ  
 嵐のしけりえ方あつち  
 宋儀もさす葉のし  
 ちの葉色の影もさす葉のし

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

道へ橋をさすくも橋のひそ  
夢後のつらりよふまのりの  
親父の飯さしは清浄の川にそそ  
さ終らふくけ彼岸より虫  
我風や赤州貴氣蜂れを  
そ危きひし毒のふ家  
ひ月よ美濃のひもものま  
海はくち終くぬうくねん  
番掛ハ多ゆつてもめくもまよ  
四里のひりくも舟の岩角  
大腹をハをハさつれてもよ  
松の子とく千下帯もね

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

まこ柳のひね折波のよ安貝  
瀬は塔屋の橋家のの庭  
破小舟削志くけくそを  
本城子くくく吉砂地の  
そ多やうに築きく庭の月  
かくくく木る山の  
味暗すくくき松の谷傳ひ  
三子せいのひくや降り若  
つらくも大老の門や火吹竹  
出くく和あるのくくく  
是くくくくくくくくく  
寺の里橋もくくく

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

三  
鳥山や終古の胸千流るるむ  
羽筆と終ハ風まらるるこ  
直らるるふかき一こころ竹の波  
夕白こころ終るこ胸海に終る  
小体利のあかき河りもこやわらふ  
いろこころぬおを憐れもこ火  
下るるこころの足半牛の背  
幹水の桶おかきこころこころハ  
上方のかう記まねぬ使こころ  
こころもこころゆひこころかきこころこころ  
孫けや二度うくこころあはれ  
若もこころちやこころ花かさあはれ

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

三  
岩橋のよりの少袖を引こころ  
一汗あきこころ苦川の月  
三  
お拭の雪こころ浪やまきこころん  
ら根罪障こころこころの浪  
こころけま死の海をなこころ  
もこころ小きこころみこころ面月こころ  
開爛の大地既こころ大砂障  
若こころかこころこころあこころ終  
つこころ鬼の目こころけの袖襟  
おこころの燈こころこころハ雀 魚  
茶刀の先こころこころみこころあこころこころ  
もあこころやあ植のこころゆ

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

夜ふ深し神の白  
跡のハ草多き葉に灰  
花の葉の明き物と  
古郷のハ裁付たや  
岸のハ何をも思ふ  
義経は是れを  
玉子撫らむ  
吟も昔の如く  
和音の好む  
朝方

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

揚屋のハ力多き  
乙女のハ白濁子の  
長船のハ後方の  
石山の寺  
是れ彼岸の  
古殿のハ  
よしのハ  
宮のハ  
さし  
朝方

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青

おろろろ新千世の花ハシ  
ろやらのくろく山里の春  
風

次韻 天和元年酉

表題

晋伯倫傳酒德頌樂天絶  
酒功讚青追之續信德七百

五十韻

二百五十句

あまのりそまろ八志の花子れと

三 又のさねのまもれく

三 依のゆれ子肝去く残るく

柳青

直	句	以	テ	莊	子	可	レ	見	ツ	矣	其	角	
綠	骨	少	カ	な	く	子	來	ち	り	に	才	磨	
志	く	く	い	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	揚	水	
心	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	角	高	
激	雨	ゆ	く	麻	く	山	の	木	官	く	水	高	
栗	く	科	さ	く	秦	く	く	の	守	く	水	高	
依	す	ぬ	画	眉	も	字	の	呼	き	ん	角	高	
恙	出	す	か	り	一	つ	れ	く	す	く	角	高	
本	の	く	此	乞	食	の	肝	の	い	を	す	水	高
先	祖	を	尺	く	く	く	く	く	く	く	水	高	
妙	を	く	く	く	く	く	く	く	く	く	角	高	

言  
女ハ赤く子ニヤオクシ  
武吉女又まつりそ何れなる  
さハ引く後ハ引く恨  
ろろ其猫ハ身を背けり  
家子膏之具易別易志  
乳子ノ穀ハ角ハ草ハ葉  
去秋を花ハ食ハ心ハ  
白魚もかきく餅春の  
實子ハ人細社合を  
徳士提灯も秋ハ  
くハ多し女角のあり

血柳ハ病を和や忍あらん  
了れ来しむらん悲なる  
因樹ハ心ハものくハ  
名  
天帝ノ目安をきくハ  
桂を振つる星輝を  
市の旗子風の舞を  
秋ハ菊ハ  
白キ親仁紅紫村ハ  
絶ハ火氣細ハ  
師魚ハ諫ハ鰻ハ  
安房ハ岬ハ法人ハ  
向陽ハ

四十四

四十四

柏杞子 初青 什魂 鳥の魄  
 志人 此 狭子 似る かり 夏 外  
 而 こと ころ けり 可 多 風 の 姿  
 夕 暮 暮 息 子 控 子 吐 吐 吐  
 民 屋 何 の け 服 を せ ぐ ち ち  
 嘆 心 の 木 趣 子 子 此 地 味 味  
 子 子 家 わ ぐ ぐ 出 出 出 古 是  
 月 尺 子 心 子 解 子 白 崎 子 子  
 あ ぐ ん と 文 子 子 子 子 子 子  
 後 軍 子 子 子 子 子 子 子 子  
 約 取 子 子 子 子 子 子 子 子  
 花 子 子 子 子 子 子 子 子

青 水 青 角 水 廣 角 青 廣 水 青

幣 子 桑 作 子 純 の 子 子  
 角

同

厚 子 子 子 子 子 子 子 子  
 春 子 子 子 子 子 子 子 子  
 丁 子 子 子 子 子 子 子 子  
 月 子 子 子 子 子 子 子 子  
 海 子 子 子 子 子 子 子 子  
 以 子 子 子 子 子 子 子 子  
 夕 子 子 子 子 子 子 子 子  
 夜 監 子 子 子 子 子 子 子 子

其 角  
 才 廣  
 楊 水  
 桃 青  
 角  
 青  
 水



根の合とわくく霜受りてはハ  
垣割かきく再りて後立  
白の秋いりみえりては且夕  
雲より志くむ妹の首髪  
子のいさく後子息の跡をい  
後と云くは無常の位  
小納す木枕の帯さすりて  
納戸の神も有りて糸の  
煤掃の禮用於鯨之脯  
庭いぬの箱置原うりて入  
風いにく牛走りわくあつたに  
煮石子すき松屎をたぐ

角 磨 水 青 角 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨

椽しと白骨の陰聚けしむる  
より利利話もよき長し  
得小僧豆鼓り月の跡を割か  
骨を写す芭蕉子しを風  
花のまの跡子羊を直きり  
樓子子籍をつりてりて春  
三 小帯のいひきりハ古寺の雲を掃  
箕も見るる重く在りてん  
布りて此かろりの枝の葉干セル  
山を踏む抱くをきり  
忍心女子人ハ既花すしのこし  
木柙のおれりて木爪の唇

角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨



心匠やふ船より針さきし生小舟  
 中庭より尾より行を山山走  
 麦早く作盤の史くをも受く  
 勅使茅原の御所草子  
 新をも草子物のもをも運く  
 多やきのあれ作くさく  
 津のふれ生田の森の初月夜  
 そさかふくはくを食場  
 寺のふく史田く里れ織  
 寺の納豆の煮所  
 よふこのれも梅花の甲の光を信  
 米炭をよふく小畑を

角 磨 水 角 磨 水 角 磨 水 角 磨 水 角 磨 水

膳をもそは小籠の信あり新く  
 竹の戸を人ま川下女うおろされ  
 折る孫よりくまこくよ  
 海のみすまんしと  
 多とををくくまらるあは理木  
 多あ休のく寸就る花の海  
 如泉はけりきき力

角 磨 水 角 磨 水 角 磨 水 角 磨 水

同

才磨

寺ありあくさ泉をハ秋の砂舟  
 後をもく内へ株を色

揚水

阿の枝ももぢ子ハ菊子も新く  
 能きいすうう生海流漸く  
 雪の雪みきれの雪くちまきハ  
 蕨の雪の雪子題を役る  
 赤やつこかられた風林林と叫  
 折りて雨折るを是として阿不思し  
 婿—きや中折のせびく後付を  
 急ゆめれいこ牛子子付り  
 ちる文も柱の戸板もこら板す  
 枯ゆく右りあるこむむ  
 盤能の位をいぬハ蓮—と  
 卒折海の男ゆりこ叫きる  
 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

骨刀かきけ路ゆらきこ  
 瘦—うの氣子 籠—つ  
 肉子七角もこらハきのふ器  
 米—音付耳り 雪けき  
 きもかびく美子折く秋もそ  
 雪折屋士—お子こハ月  
 子耕す雪破の雪子花つけ  
 茎—茶もれきりれ 湯—む  
 辰雪の敷入車や— 睡る  
 新—や上お清—ぬ雪のさ片  
 尻中—お提了おの雪折の雪も  
 提打き—お提よけりい  
 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

風おの角地とめを怪り  
入の山あみ狼子  
雷の谷下とく  
言くと又言  
俗のふ麻島は海に底ふ  
野のりは東に代赤  
何を愛り  
ひるふ  
有を昔く  
梁可  
雲霧の羽の  
えは起る

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

釜うぶる人の志のひるふ  
穂を  
古家の  
い  
麻の  
あ  
き  
ゆ  
人  
石  
木

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

三  
花雨基ノ弘ハ家ニ也レキツ  
強子ノ進サル新キラクシ  
大根の葉越の園のこあさう  
おとら〜や火桶の姫の縁  
ろろ〜一床一簾引つ  
とや〜と箱入〜  
通〜首の泣〜  
中〜い〜れ恨〜  
候〜や〜あ〜今〜  
〜い〜有〜村〜  
優〜一〜や〜十〜

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

三  
秋の葉後〜  
任持ゆ〜  
三  
海老の〜  
急崎の松〜  
ト〜  
地〜  
無〜  
清〜  
川〜  
志尼〜

角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

五  
十  
三



新... 角  
... 入

同 舞 舞  
楊水

附... 桃青  
... 才丸

天和... 康城

... 子春

... 卜尺  
... 曉雲  
... 甘角  
... 芭蕉  
... 素半  
... 似春  
... 非雲  
... 言水  
... 執筆  
... 樹  
... 尺

悴くはるの聲をもよわう  
於杖の精の心くたへり  
竹柳坊卒おはせを言の字林  
ハ春の月をまきと揮く  
味も竹の心もおはせを言の字林  
泣く柳の心くたへり  
萬葉の花訓の足入り  
於杖の地をまきと揮く  
<sup>二</sup> 於杖の形をまきと揮く  
飛鷹の心くたへり  
琴の代ハ隅の町と我の心  
物言く玉おき一樓

暁 角 暁 子 似 昨 之 角 暁 堂

五十五

おはせはるの聲をもよわう  
於杖の精の心くたへり  
竹柳坊卒おはせを言の字林  
ハ春の月をまきと揮く  
味も竹の心もおはせを言の字林  
泣く柳の心くたへり  
萬葉の花訓の足入り  
於杖の地をまきと揮く  
<sup>二</sup> 於杖の形をまきと揮く  
飛鷹の心くたへり  
琴の代ハ隅の町と我の心  
物言く玉おき一樓

暁 角 暁 子 似 昨 之 角 暁 堂

五十六

此の舟伊勢の舟尾張の舟  
波の白浪もよみよみ  
契情もくもくもくもく  
と青もよもよもよもよも  
柳の枝もよもよもよも  
危殆も概りかたれり  
いとくぬ後心もよもよも  
夢ささるも院もよもよも  
かきりみりかたれり  
此れ觸も花もよもよも  
岩ののみ花もよもよも

五  
十  
五

角 堂 堂 子 尺 明 角 曉 堂 附 似

古事の月の中りの舟も  
雲のくもくもくもく  
山もよもよもよもよも  
柳の枝もよもよもよも  
と青もよもよもよもよも  
松の社もよもよもよも  
城もよもよもよもよも  
成トもよもよもよもよも  
松小もよもよもよもよも  
寺の方もよもよもよもよも  
かきりみりかたれり

五  
十  
五

堂 角 曉 水 霧 堂 附 魚 此 似 子 尺 曉



我有り此中舟の中を  
廻思君境何事留  
肩を倚く短舟の尻を躁く  
真まきの色隔り堀 志  
舟火を刀をけく志の山  
浪の并積りかくる舟人  
物後ふ鹽をふまきく舟に  
蒼つづく向此が屋く  
市街のありをみく本陰ま  
り傘さきうみと煙と男と  
玄舞くし舟をさきく舟に  
夜くも思ふ袋 柳 灯

角 暁 暁 暁 暁 暁 暁 暁 暁

花のたぐ望人柳子流り  
八重く 雲飛りかた物

角 暁

秋風

舟をのりて伊賀の山越来の  
夕ハくもくしにかきむ武の  
店賃のさか軒帰るまの来る  
とやかやうやうまきま  
散る船さるる舟の月を  
後そ来り積ハ八可七の  
舟くき傷の瘡を言て  
まのめれ海を待たり

秋風 暁 暁



消跡る子棚の幕の夕方のけ  
火張のけの一二寸ほど  
何もの後め折るる花のけ  
に戸下と上神ふもりのま

同

さすのまのきり香を張るるや、  
美子ぬく一階細か  
後のはる海儀竹はた織る  
弦もふ張るるもりのま  
面はふ張るる張るる  
さるる、二十八針、まん

世是

一  
麩

きささしや武名物終る  
後家ゆき雨の翠の魚のけから  
かろくも旅のけが、夕宵の里  
文くくもこのけ、門たくくおと  
初る香けを賞する人あらん  
一箇の粥、江の焼屋舟  
不煮る物、とる肥るる  
香風、弦、倫、乃、雪  
シロ子う精かを、さし、月、廻る  
味、萩、末、也、も、り、あ、き、茶、葉  
若、紗、を、橋、の、端、を、さ、り、そ、り、く  
甚、尾、の、風、は、終、る、る、ま、り、く

陽春の果敢屋に化つたの大工  
嫁に嫁買百手よ 粟  
と那のくくは是若の顔も引  
様りの坂は清くは溜るぬ  
血を流す甲と好うのけ屋  
餅をぬるりの大寺よ 俵  
長史ふく乞食ハ家ハ紫竹  
子衣もふく牛菜の葉  
崩すく頼ハ又多此端をう  
古佛の殿に候者をも月  
をきくはれ麓山伏の袖めり  
仲白雪の店こり 三

らきり香牡丹ハ昼の如く火子  
白袋袖躍り中免 梨 花  
赤信免了己輝とく雨海に  
夕新長若且あけりん  
丸ハ此殿に在る花を煉  
序をさきぬり 友の文 橋

同  
柳竹垣穂十木瓜も骨赤う丸  
笠おきくは口の赤の赤おく両  
あけりく常り橋を掛らん  
市子小字をさき 新 月

栗樹

一目

芭蕉

樹

良字の庵、少油を打可けり  
紅白の菊、地を基を採  
新らる、卯塔、西のりごとく  
今人ハ、極を可く、みれり  
楊子、北天、大、海、廣、く、み  
上、等、の、部、と、い、ふ、三、線  
く、ま、の、程、も、編、り、彩、り  
密、丈、一、咫、よ、い、め、ら、つ、た、ま、り  
新、の、程、の、ら、み、り、地、を、起、ま、り  
く、く、と、製、ま、り、葛、の、い、何、も、  
母、の、親、り、み、や、え、く、肉、も、か、見、り、  
く、も、能、く、く、く、ぬ、め、を、と、く、く、

晶 樹 晶 樹 晶 樹 晶 樹 晶 樹

通、初、米、の、階、首、を、祝、く、く、  
梅、次、清、く、拍、子、り、り、  
ま、風、の、地、り、後、を、り、り、  
か、く、す、ハ、縁、を、告、る、ま、く、  
院、の、ゆ、り、餅、米、お、ん、君、く、迷、り、  
青、葉、津、け、た、り、り、織、す、り、  
凡、の、緒、燈、りの、ま、り、や、括、り、  
内、野、を、た、り、り、是、行、の、意、  
新、く、き、塚、ゆ、り、り、呼、り、  
毫、を、後、け、臣、り、り、  
お、金、え、り、り、く、美、出、り、  
飛、姫、も、た、れ、ハ、油、り、り、

晶 樹 晶 樹 晶 樹 晶 樹 晶 樹

十一年の三ノ季と先の九十九  
 里のこゝらう念佛 七をく  
 達生火と諸衆 未きうう  
 智故るを 畫しり 紳 数  
 高古此群おり 画を 買を了  
 於し 樂をともる 幅端の子代  
 佛話の空を 花の 浮粒人  
 了 跡し 被 おく 了 表 体

晶 魚 樹 晶 魚 樹 晶 魚

て和之登交手

花々々々 無系 海走らく 食是し  
 妙少くも 有る 了 歸 片の 瘦

芭蕉

一品

朝陽て 暮涼 之と 嘆く 了ん  
 寺子 保を 子 折に 名 梅  
 肉を 湯を けの 舞を と 芦 可く  
 眼の さく けり 多ふ と 弱 新  
 習 電 流 ふ あり 朝 此 雨 あり  
 朝 夕 志 何 を ふ 了 了 衣  
 浪 人の 志 する を 結し 且 百  
 や 子 の 一 歌 あり 入ん 可い と 子 不  
 花 猿 同 宗 昔 を 誓い 以て  
 有ハ 退之の 解 視を 奪つ  
 雷 多の 初 ちを 音 を 鳴 ありん  
 夕 照 海 あり 松 魚 原 家

晶 雪 貫 角 景 雪 晶 筆 景 景 晶 雪

雲情の鏡を接し糸代より  
雨織より角をとくし風依極  
河し那の松をわく子の月  
破魚 隈ッく信の上を次  
新解子 西瓜を踏つてく  
つしきくぬひの松浦片 播  
欠つた尺の楊笈くしり置底  
母ハ私にたさくしき後のむ  
松入ぬ糸ハ六十の荆うさぎ  
山所より故すうく表を東し  
人の情を結長の宵の曇子延く  
松尺くしきやきやのゆけをた

晶 角 雲 晶 魚 雲 晶 角 晶

きくしや 中子似をいひあうく  
山野子 飢る餅を食ふ  
空井の月より伯夷は是後よ  
木城ハ武士の情 仲  
尺くしき 巻書も杖や柴杖  
名心さんやこ駒の尻月心  
曉の霜をを母子受されく  
路より 巻心あうすうく  
花より 柘原山の列をく  
梅子す好く 瀑布を酒飲

晶 角 雲 晶 魚 雲 晶 角 晶

同

酒債尋常往處在

人生七十古來稀

其角

酒めきんと手も食の酒債外  
 各一湖日暮ヲ駕馬鯉  
 于死き夷ヲ圍をゆきしむ  
 之編人の鬼を泣し一々  
 力ハ袖をろき佛の膝の上  
 時ハ胸をくく、夜はふじ  
 和ハぬ借をも、多ハ叫び  
 時由山さたか、こころを  
 世竹のとくくを、後か  
 時、時りきり、居、居、を、思  
 角、角、角、角、角、角、角、角

一の娘里の良女も、善く、  
 斬り、けり、けり、けり、  
 けり、けり、怒の雲、  
 浮き、きり、志、川、  
 出、花、負、年、一、  
 芭蕉、下、り、の、  
 腐、れ、く、細、  
 解、く、く、く、  
 算、入、の、  
 けり、けり、けり、  
 嘲、り、ニ、  
 是、角、く、り、  
 角、角、角、角、角、角、角、角

枯葉製茶螺の角を煮て丸  
 鷹神を使つて荒海のまを  
 鐵の弓を取らけきやうやう  
 虎 妹 子 始 の 取 り け ぎ  
 一 年 ぐ 四 膳 の 床 を 火 煎 じ  
 押 火 溜 る 指 の ち も 一 火  
 下 目 后 糸 を 紐 じ 月 を 牙  
 西 瓜 を 後 子 づ ち ち ち ち  
 三 言 い づ ち 株 形 の け ち 吹 鳴 じ  
 み ら れ け ぐ の 東 一 づ ぬ 石 白  
 武 士 の 澄 の 丸 舟 故 ち 寸  
 八 ち づ づ 的 け ち ち ち 告 づ

角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角 並

付あきいゝ花を食ひ海徒外  
 春一湖 日暮ヲ 鷹無吟 角 並

同

一季三百六十日

五の吹雪三日

李下

乾や々 季 ち 向 け 煮 き じ  
 去 ち 去 じ 浪 子 大 根 ち 舟 女 角  
 月 ち ち ち 草 の 海 ち 枯 づ ち 下  
 ち ち ち ち ち 草 を ち ち ち ち 下  
 百 ち ち ち ち 秋 を ち ち ち ち 下  
 傾 婦 を 葉 の 替 ち ち ち 角

敵の階の色を写す行針  
然らば一音の敵  
又育れ金持ハ書をまつて  
みえとくへ願ふら善ふ  
世に志のいほとりのかひなき  
士峰のやをてむか賀殿  
松石く玉子曳の張こく  
名をくらかし黒木津柳  
松葉の花たつ男内ゆり  
まの月果とく河心のあふ  
月を写す生指のくれ上戸也  
是と志らくくむがさ新強

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下

新の階の色を写す行針  
院のほ家のいほとりのかひなき  
おをよる系少社を思はむ  
仕阻とくくくくくくくくくく  
墨海子女房中くくくくくく  
南みくくかきし地とくくく  
篇よる。強骨何そ女情  
ゆそよの切氣柳の記  
破くくく冷系ハ秋のむくく  
くぬ衣の格子時を懐む  
名月のあハ流くくくくく  
金持行子 柏のみを写す

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下

角 下

柴生家も世物奴にさきん  
すし強ふ少く学事はれ 角  
寸法切の衣は片一のたふ 芭蕉  
昔も力む率初儀大小 小  
侍の多門も尺もよ花のや  
凡丈三百人の事うら

寛文十戌年

果と信もさそれ之肌をぬくと衣  
交走し可保すゆく玉民  
かけ作し何茶ねもくに足渡り

助勝

宗房

同

披ハ家ゆ玉お友カの一葉切  
く糸山美の短すつふふ秋風  
冷しき石ハささうう虎子似

長忠

宗房

同七未年 一白附

肩も急物うらものうらうら  
くもたしけと何山むりの家  
好生、好のふとみきかふい  
志和の鈴あまのまのつとカ

宗房

宗

勝つ 蒲をくわたりてきさつしりぬ  
おのきおしりしりぬと海をかえん  
訪

延享六年

大抵層の怪しきもに不二の難  
故にさしりぬ舟田子の海女  
松青

虫の聲の響しつゝふあつたりぬ  
瓜の井ごの空をきりぬ

孔子ハ鯉魚のさしりぬ海女  
おのきしりぬ海女は海女

祝祭其乃くつしりぬ  
おのきしりぬ海女は海女

物乃く鬼の甜食の生 春  
おのきしりぬ海女は海女

秋梅乃大忌 熱の苦をさす  
仁義 苦の海女は海女

根柵のさしりぬ海女は海女  
大字の海女は海女

確のくくく集まや入あらん  
大伴孝良殿とあはれの御時

或るくくを引つらひとよると  
敵くくくくを足さくく尾つき

桶ひくく物のこころとくくく  
そは人言をぬくみその虫

くくあうくくあはれ秋あくく  
唐細あひはくくの海浪

あまをくくくくはくくく紫木  
中くくくくくくくくく

くくく既くくくあゆめ時ハ  
御あくくくくくくくく

砂のくくく業尻あくの末  
此界もくくくくくく大御孫

あはくくくくくくくく海浪  
ゆきくくくくくくくく

上ハ服々一 中ハ竹 簾  
夏中ハに秋子也一の禮是

心平かあふ長持のあは

送る箱是かあはあはあは

息の弱きき 海平はめは  
女院 話の二位ハ尾鯛

大正の退屈くすあ紫する

唯信院のちのつきし箱紫山

宵のくくあはあはあはあは

みのまき小植あは玉のせら

子響きあはあはあはあはあは

昔のあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあは

是もあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあは

昔もあはあはあはあはあは

まろふの松海より五節の河  
を舟のりて舟に... 京橋

了和年中

伴加藤集物

青府

栗原志山翁余厨、秋了りて  
自紀飾りるる、可戸の松  
佛寺庵より書は坂をゆりてん

一品  
桃青

天和四甲子

春のい

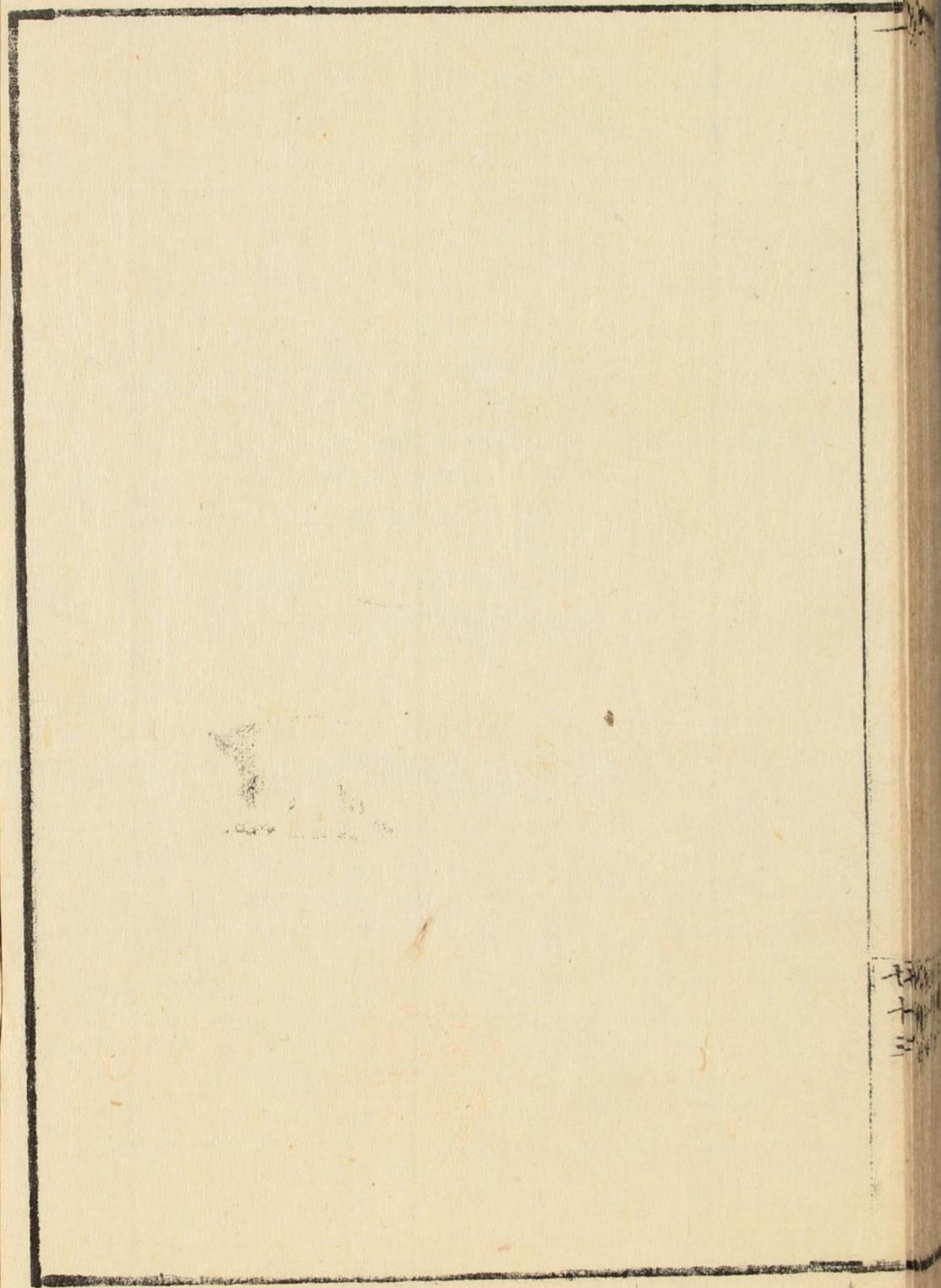
昔は道成ふる、白く字を籠之よし  
月とみゆきと海を、食

芭蕉

枯枝子、秋のよき、秋のよき  
秋のよき、秋のよき、秋のよき

芭蕉

素巻



七  
十  
三

